

第3章 職場のエスノメソドロジー

正島 祐子

1. 調査の概要

1-1. はじめに

はじめに、私たちが行った調査地及び調査内容について簡単に説明する。

今回の撮影を行った場所はZ園である。Z園では入所者、通所者含めそれぞれが各作業場で働いている。施設の詳しい内容は第Ⅱ部第1章の林の本文に載せているので参考にしたい。その働いている方の中で私と原田が調査をさせていただいた方は大見敏一さん（仮名）である。大見さん自身の障害やZ園に入所された経緯については付録にインタビュー記録をつけている。大見敏一さんは軽作業場で作業しており、8月4日に行っていたことは緑のプラスチックのようなものを必要な部分といらぬ部分とに手でちぎり分ける作業であった。次にビデオ撮影を行った12月は刺身の飾りに使うプラスチックの菊を必要な部分といらぬ部分とに手でちぎり分ける作業であり、作業するものは8月と異なっていたが作業のやり方はほぼ同じである。

このように私たちは8月4日と12月15日の2回にわたりビデオ撮影をした。8月は仕事場だけでなく大見さんの部屋での休憩、移動、食事など普段の生活も撮影させてもらい、多くの場面を撮らせていただいた。

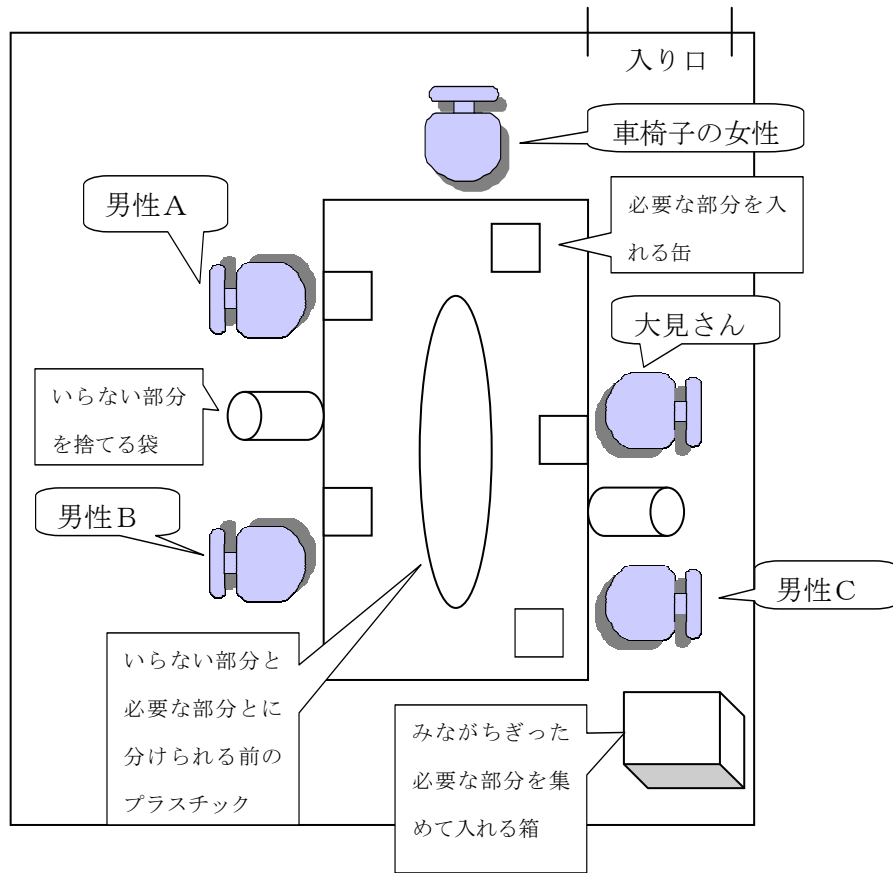
1-2. 注目場面

その中で私が注目する場面は大見さんの作業場面である。8月と12月では緑のプラスチックと菊とで作業物は異なっていた。しかしもっとも注目したのは作業の場所が異なっていたことである。このことに注目し、人、場所の移動などの作業空間の違いを二回のビデオ撮影を比較し分析を行う。

2. 8月4日のビデオ撮影について

8月の時は、基本的に大見さんを含めて5人で緑のプラスチックのものを手で分ける作業を行っていた。写真1に当時の作業の様子を示し、図1にそれをわかりやすく図にしている。

作業時間は、午前は9時から12時で昼食を1時間はさみ、午後は1時から3時、休憩を15分はさみ、3時15分から5時までとなっている。その中で実際に撮影した時間は、DVカメラ（手でもち随時大見さんを追いかけることができる）は9:19~9:58,10:40~11:04,11:15~11:20,11:26~12:00,13:03~13:23,13:25~14:25,14:29~15:18,15:19~15:30,15:31~15:35,15:38~16:32,16:35~16:40,16:42~16:47で、Hi8カメラ（作業場に固定し、全体を撮影したカメラ）は9:05~11:04,11:10~14:18,14:22~16:43である。



【図1 8月4日の座席配置図】



【写真1 5人が作業している様子 (2004.8.4 1:10 PM)】

まず大見さんは図の右の入り口に近い場所に座っている。右手で中央のプラスチックをとり、大見さんの向かって左にある缶に右手で入れる。左手は右手でプラスチックをちぎる時にプラスチックを押しやる役目を果たしている。そしていらぬ部分は大見さんの左横においている袋に集めている。大見さんが作業をしている場面は下の写真 2 を参照してほしい。



【写真 2 大見さんの作業の様子 (2004.8.4 9:17AM)】

次に一番入り口に近い場所に座っている女性は車椅子で作業をされている。車椅子であるため、この狭い作業場の中では作業中に部屋を出る以外の車椅子での移動はしない。

男性Aの方は、比較的左手が動きやすい。左手で中央のプラスチックをとり、右手で持って左手でちぎり、左手で捨てる部分を自分の右においている袋に捨てている。袋に入れるときは左手を右に持っていかなければならないので体勢が右に傾く場面が見られる。

男性Bは、プラスチックを必要な部分と、いらぬ部分に分ける作業を全部右手で行っていた。しかし缶は男性Bの左前に置いている。机の中央から自分のところに持ってきたプラスチックをその缶の上で、必要な部分といらぬ部分とに分けている。こうすることによってちぎって落ちる必要な部分が必然的に下にある缶の中に入っていくので後にちぎった必要な部分を集める手間が省けるのである。男性Bが缶の上で作業をしている場面は次項の写真 3 を参照してほしい。



【写真3 男性Bの作業の様子（2004.8.4 10:13AM）】

そして捨てる場所だけになったプラスチックを右手で左にある袋に入れている。いらぬ部分を入れる袋は男性Aと共有しているようである。そのように作業を行っているので男性Bは体を正面よりやや左に向けて作業を行っている。

最後に男性Cはこの日に作業している 5 人の中で最も作業中にいなかった回数が多い方であった。なぜこんなに席を立つ回数が多かったのかはわからないが、今回の撮影でこの男性は 9:41~9:55、9:56~10:16、10:31~11:00、11:20~12:00、13:00~13:44 しか仕事場にはいなかった。

そして男性Cが作業をするやり方は他の 4 人とは違っている。男性Cは中央から持ってきたプラスチックを（この時点で他の 4 人が一回に取る量より少し多い。）手で、必要な部分といらぬ部分とにちぎるのではなくて両手を使い、机で、もむようにしてもんだ力で必要な部分を取っている。実際に今回の緑のプラスチックは必要な部分と捨てる部分は実と枝のような構造になっていてその境目は細くなっていて少しの力でも取れるようになっている。

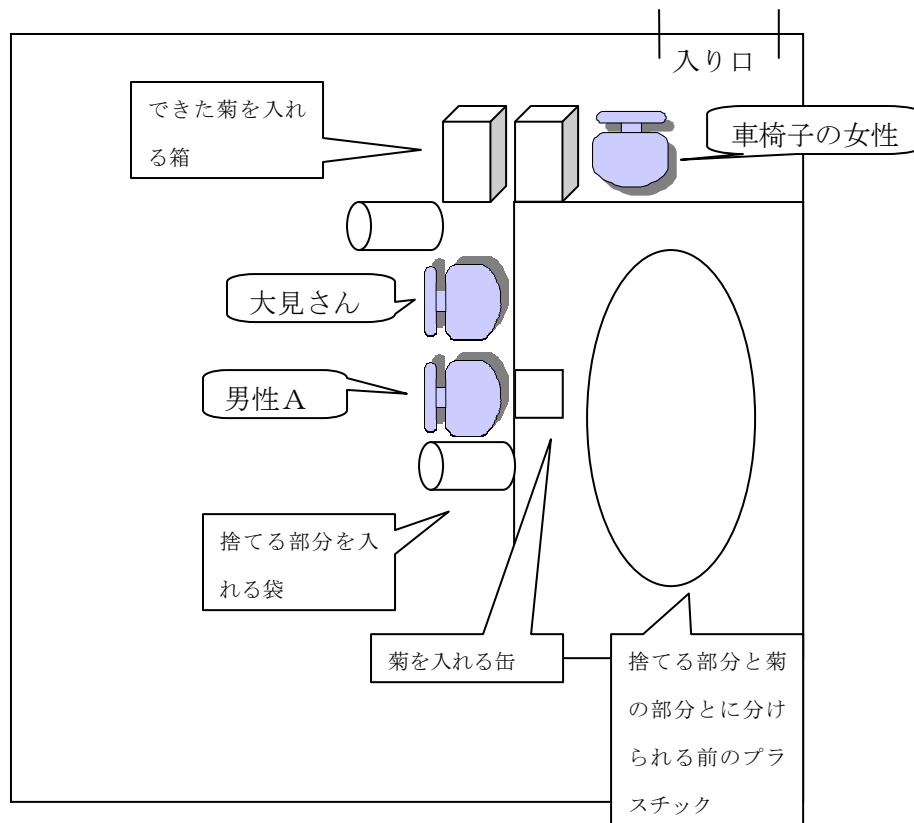
このため、もむだけでばらばらと必要な部分が下に落ちてくるのである。そうして何度かもんだあとに下に落ちている、必要な部分を両手で集め左手においている缶に移す。しかし、もんだだけでは全部は落ちないのでまだくっついていくつかの緑のプラスチックは手で取り、全部取れたら捨てる部分を別の袋に入れる。この作業を繰り返している。男性Cが作業をしている様子は次項の写真4を参照してほしい。



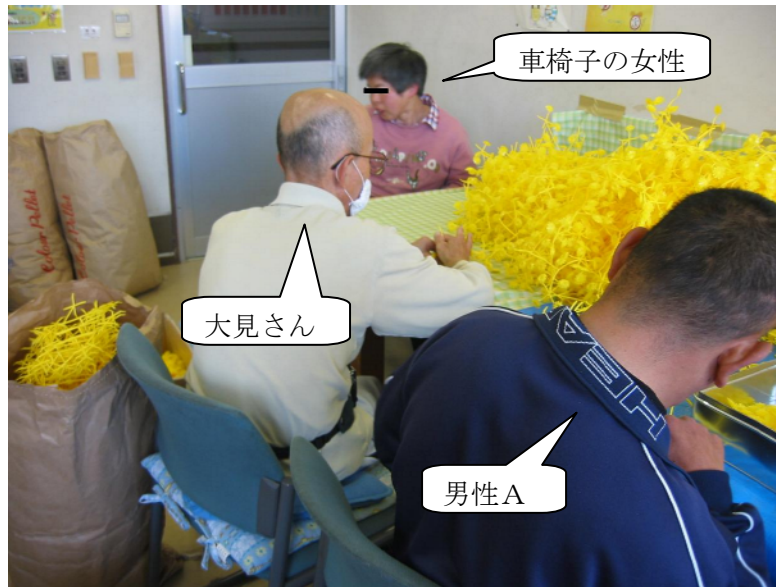
【写真4 男性Cの作業の様子（2004.8.4 1:10 PM）】

3. 12月15日のビデオ撮影について

12月15日は大見さんも含めて3人の方が作業を行っていた。作業を行う部屋は同じであったが、人の配置と机の配置が8月に比べて大きく変化していた。写真5にそのときの作業の写真を示し、詳しく図にしたものを図2に示している。（12月の撮影はタイムコード表示に失敗してしまい、撮影時の詳細な時間が出せていない。）



【図2 12月15日の座席配置図】



【写真5 3人の作業の様子】

まず机の位置は真ん中から、壁側に寄せられていて8月に大見さんがいた場所は埋められている。そして、机には菊のプラスチックが壁側に落ちないように机と壁との間にブルーシートで隙間を埋める工夫がなされている。

大見さんは、8月に男性Aが作業をしていた場所で今回は作業を行っている。そして大見さんは男性Aに背を向けるように左側に座っている。大見さんは左手の方にゴミとなった枝の部分を入れる袋をおき、右手には菊を入れる箱を置いている。大見さんは右手で菊を取り、そのまま右においている箱へ投げ入れている。大見さんが作業をしている場面は下の写真6を参照してほしい。



【写真6 大見さんの作業の様子】

車椅子の女性は 8 月の撮影の時と場所は変わっていない。入り口に近いことで彼女の移動がしやすいのではないのだろうか。8 月と同じように作業中に部屋を出る以外の車椅子での移動はしていない。

男性 A は 8 月に作業をしていた場所から横にずれる形になっている。しかし、できた菊のプラスチックを入れる缶を体の正面においていること、また捨てる部分を入れる袋を右においている配置は 8 月と変わっていないようである。男性 A が作業をしている場面は写真 7 を参照してほしい。



【写真 7 男性 A が作業をしている様子】

4. 注目部分

ここで注目したのは、大見さんと男性 A の位置である。明らかに二人は近く、しかも大見さんは入り口の方に、男性 A は体を窓側の方向に向けて座っているため見た目にはお互いがくっついて作業をしているように見える。以下では詳しく彼らの動作をみていく。

4-1. 男性 A が菊を落とした場面

今回の 1 時間 7 分 56 秒の撮影で男性 A が菊を落とす場面が 6 回見られた。その中で注目したのは 6 回とも男性 A が菊を落とすと必ず大見さんが視線を右下に向ける場面が見られることである。大見さんが視線を右下に向ける場面は次項の写真 8 を参照してほしい。男性 A は、菊を落とすと、左手で拾うために体を大見さんのいるほうへ傾ける。



【写真8 大見さんが目線を下に落とす】

4-2. 作業前のプラスチックを引き寄せる場面

8月の時も、今回の12月もまず中央においた作業前のプラスチックを毎回自分のところに引き寄せることから一連の作業は始まっている。この引き寄せる動作についてみられた8月と12月の違いは引き寄せる場所の違いである。大見さんは体を横にしているが自分の正面から作業前のプラスチックを引き寄せている。しかし男性Aは大見さん寄りの左から引き寄せている。

4-3. 作業前のプラスチックを補充する場面

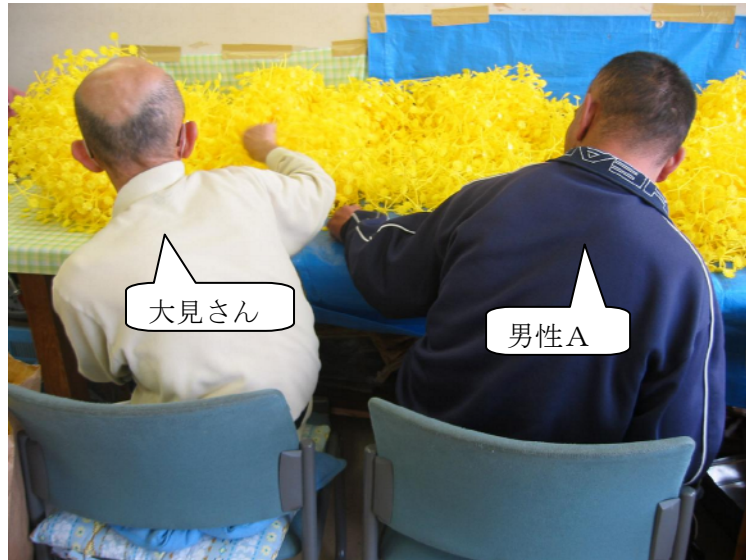
男性Aがプラスチックを補充する場面がある。男性Aは持ってきた新しい袋を大見さんの前でさかさまにし、袋の下の部分を振りながら中に入っているプラスチックを出そうとする。しかし、大見さんは出てきたプラスチックを手で払いのける動作を2回し男性Aに示している。その場面は下の写真9を参照してほしい。



【写真9 大見さんが手で払いのける】

4-4. 二人の位置

二人の距離は8月に比べてどの隣同士の距離関係よりも近かった。下の写真10を参照してほしい。



【写真10 二人の位置】

男性Aが菊を落とすたびに大見さんが気にする動作や、男性Aが持ってきた新しい袋を大見さんの前でさかさまにし、袋の下の部分を振りながら中に入っているプラスチックを出そうとするが大見さんは出てきたプラスチックを手で払いのける動作を2回し男性Aに示している部分をみると一見作業がしにくい環境のように見える。二人の位置には何が生じているのだろうか。

5. 分析

観察からはさまざまな視線の動きや動作が見られたがしかし、ビデオ撮影をしている時間内にはどちらとも作業の場所を変えようとはせず作業を続けていた。二人の位置は上に挙げたような作業のしにくさというトラブルを一見示しているようで、むしろそれらのトラブルが起きていないことの現れとも考えることができる。トラブル回避の最終手段である「作業の場所を変える」というお互いが作業しやすいように二人の距離をとることまでに至らない今の状況がトラブルには至っていないことの証拠になっているのだろうか。

まず、アダム・ケンドンというF陣形（F-formation）の視点から考えてみる。F陣形とは対面的相互行為において特定の身体配置を示すものである。西坂（2001）は加えてF陣形への身体の配置において「重要なのはあくまでも身体の上に表される参加者の志向であって、身体的の物理的な位置・向きではない」として、そもそも『参加者の「操作領域」は、各自の前面に拡がっている必要はない。』という。また相互行為空間の定義についても以下のように示している。

相互行為空間とは、参与者たちが、相互行為の展開のなかで、共同の志向を共同で組織するための空間であり、身体的位置や向きにより、志向的に（物理的ではなく）境界づけられている空間である。

つまり物理的には近い大見さんと男性Aの距離も、相互行為空間としてみればお互いの志向のもとにきちんと境界づけられているということになる。このことから作業の場所を変えないのは物理的には見えない境界線が二人の間に存在し、この職場での二人の間には秩序だった空間が成立しているからだ、とも説明がつくのではないだろうか。

6. まとめ

それぞれが自分の障害の程度（手足の動ける範囲や力など）に合わせて作業が行いやすいスタイルをとっていることがわかった。そしてその中で作業に使う道具を共有し、個々で作業がやりやすい人がその部分の作業を行っていることも観察できた。しかし、最も注目に値するのはこの空間における職場の秩序というものが決して障害（障害の程度や装具の種類）を基準にして成り立ってはいないことである。障害があるからといって作業の内容が変わるのではなく障害の範囲の中で同じ作業は進められ、全体にこの職場が成り立っている。つまり、Z園の大見さんが作業している職場においてなされるやりとりは障害がない職場でのやりとりと変わりはなく、障害がない職場と変わらない秩序が大見さんの職場にも存在しているのではないだろうか。

<参考文献>

西坂仰、2001、『心と行為』、岩波書店。